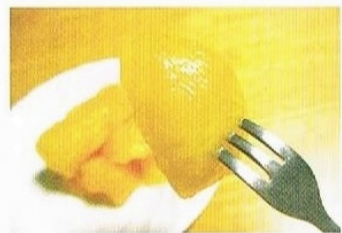


月光プラム

あべ たかし
文・写真 阿部 崇
(フードアナリスト)



「幻の○○」というフレーズをやたら耳にする。テレビの旅番組を見てみると、少々はつちやけた妙齢の女性リポーターがバスタオル一枚を体に巻いて「テレビの前のみなさん。これが『幻の温泉』と言われていた△△温泉です！」なんて場面に遭遇してしまう。私はそのたびに、「目の前にあるんだ

から『幻』じゃないじゃん」と重々しくツツコミを入れてしまいたいことになる。

「幻」とは元々、「実際にはないものがあるように見えること」「たちまち消えるもの・はかないもの」という意味である。まあ、この温泉の場合は何かしらの所以があるのだろうと二百歩譲って気を鎮めたが、このところの軽々しい「幻」の網羅に、どうにも食傷気味だったのだ。

そんな折、何の気なしに立ち寄った真夏の果物店。旬を迎えるものが多いとあって、店の陳列棚は年間で最大の彩りを見せていた。桃、すいか、ぶどう、いちじく、梨、すもも…。鮮やかな果皮の輝きは、まるで水彩のパレットのようだ。原色の鮮烈さと、パステルの柔和さに目を見張っていると、その中に、涙のような形をした見慣れない赤い果実が、スチロール網にくるまれて鎮座しているのを見つけた。商品プレートによると名前は「月光」というらしく、値段は正直、お手頃と言うには程遠い。食指が動かず、素通りしようとしたその瞬間、プレート

に書かれたフレーズが目にとまり、足も止まったのだった。

「幻のプラム」。

うーむ、弱った。素通りできない理由があるのだ。じつは私、「プラムマニア」を自負するほどのプラム

好き。新しい品種が出回ると、必ず購入して皮ごと丸齧りするほどである。ネガティブイメージの「幻」とはいえ、この機会を逃したら、次はいっお目にかかれるかわからない…。かくしてツツコミも忘れ、食傷気味はどこへやら。形の良いのを品定めして、味見することにしたのである。

齧る。皮が弾け、甘い汁がほとばしる。それは爽快と言うより、ねっとりとした蜂蜜の甘さだ。中の果肉は見事なまでの真黄色で、あたかも異国の砂糖菓子を連想させる。「水菓子」とは正に、このような果実のためにある言葉ではないか。今まで食べたプラム類のどのカテゴリーにも当てはまらない、甘美な赤きバロック（ゆがんだ真珠）であった。

「幻」も、まんざら悪くはないなあ。



この月光プラムがなぜ「幻」と呼ばれるのか。その理由は

- ①栽培が難しく、生産量がきわめて少ない。
- ②果実がデリケートで傷みやすく、全国に流通しにくい。
- ③収穫期が極端に短く、市場に出回る時期が限られている。
- ④そもそも月光プラムに関する情報があまり公開されていない。